

洪水後のミャンマー 急務となっていた乳幼児の栄養改善事業を立ち上げ —母親とともに自立と予防をめざして— CWS Japan & 味の素（「食と健康」国際協力支援プログラム）

CWS JapanはCWS Myanmarと協力し、2016年4月1日よりエヤワディ管区マウビン地区で、5歳未満の栄養改善事業を3年計画で開始しました。

「災害後の問題解決」「受益者と共に進める事業」「現状の改善と予防」の点から事業を計画、味の素「食と健康」国際協力支援プログラムの理解を得、その助成金により事業を開始しました。

毎年やってくる洪水 —多くの人困窮から立ち上がれず、乳幼児の栄養改善が急務

エヤワディ・マウビン地区は同地区は毎年深刻な洪水の被害を受けており、特に2015年の洪水ではエヤワディ地区だけでも291万人もが被災し、家財・生計手段を失い深刻な状況が続いていました。

この地区の住民は、多くが零細漁業や農業に従事し、普段から収入が少ないため、洪水後はより困窮し、借金をしても、ご飯に塩をかけて食べるという状況です。各家庭では清潔な水を得るのが困難で、お手洗いや水道がなく衛生状態が悪いため、病気になる乳幼児が多く、さらに地域の乳幼児の4割(10人のうち4人)は低体重・慢性的栄養不良を患っています。乳幼児の栄養不良問題の解決が急務となっていました。



低コスト、小スペースで可能な家庭菜園と養鶏の普及で、乳幼児の栄養改善を目指す

住民が低所得層で家の敷地も小さいことを配慮し、肥料などの経費をかけず狭い土地でできる家庭菜園と養鶏を、5歳未満の子どもをもつ女性300名(毎年100名x3年間)に指導する事業計画としました。菜園と養鶏を学んだ女性300名には、野菜の種とヒヨコを供与、野菜栽培と養鶏をすぐに開始できるような支援も行います。女性が収穫した野菜と卵・肉を子どもたちと家族で食べることで、ビタミン・ミネラル、タンパク質が摂取でき、結果的に、乳幼児と家族全員の栄養バランスの改善が期待できます。女性は野菜栽培と養鶏について学習するのと並行し、食物と栄養の学習・栄養バランスの取れたおかずの調理教室にも参加。正しい手洗い方法等の衛生教育も受け、下痢・感染症に起因する栄養不良も予防していきます。



◀ 村の母親への説明会



▲ 村の漁業はごく零細なもの。
川岸が浸食され、洪水の後がうかがえます。



▲ 仕事をする村の女性

活動を4月に開始して3か月が経過。活動参加予定の女性100名に対して、事業の説明会を開き、基礎調査も実施しました。基礎調査では女性と子どもの普段の食事内容、既存の栄養・衛生の知識、野菜栽培・養鶏の経験について聞き取りました。事業の説明会では多くの質問があり、女性たちの菜園と養鶏活動に対する強い関心が窺えました。7月からは、野菜栽培と鶏の飼育が始まります。

今後も『CWS Japan NEWSLETTER』で、ミャンマーの栄養改善事業活動の進捗を、皆様にご報告していきます。ぜひ関心をお寄せいただければと思います。

—今、求められている「真のパートナーシップ」—
大きなパワーとなるこの考えを伝えるため講演会やシンポジウムに参加しました。

「2016 世界人道サミット」でも採択されたパートナーシップを活かした
問題解決手法は、CWS Japanの価値観でもあります。

今、世界は大変厳しい状況を迎えています。紛争や災害を逃れ家を追われた人の数は、第二次大戦以降で過去最大となっています。長期化する紛争の中で流れ出す難民、そしてそれに気候変動が追い打ちをかけています。(災害による経済的な損失は年間3000億ドル(36兆円)ロシアやオランダの国家予算に匹敵します)

このような状況下で行われた「2016 世界人道サミット(トルコ)」では、共通のビジョンを持つ事によって、国やセクターが連携、それによって経済的なムダを最小限にし、この難関にあたろう、という「大取引(Grand Bargain)」という考え方が採択されました。現在世界中で問題になっている紛争・災害・格差の問題などは、一組織が解決できる規模をはるかに超えています。サミットで立ち上がったいくつかのアライアンスも、この考えを補完し実施に移行していけるようにするものでした。

「パートナーシップ」によって1+1を3以上のものにする。これは設立当初からのCWS Japanの価値観です。このように「世界人道サミット」でも主流となった「パートナーシップ」の考え方によって、世界的危機に立ち向かうため、CWS Japanでは様々な会合に出席し発言しています。今回は6月20日に参加した、2カ所での講演の内容をご報告します。

1. 国連難民高等弁務官事務所/ジャパン・プラットフォーム 共催シンポジウム 『シリア危機：人として』—分かち合う責任—

開催：2016年6月20日(月) 於：国連大学ウ・タント国際会議場 後援：外務省



◀シンポジウム
『シリア危機：人として』
第三部パネル
ディスカッションで
発言する
小美野事務局長

シンポジウム『シリア危機：人として』の第三部パネルディスカッション：「分かち合う責任」—創造的アプローチに向けて—に、小美野 剛事務局長がパネラーとして出席しました。小美野事務局長は、世界人道サミットに出席しての報告とともに、世界人道サミット開催参加へ向けておこなった日本の取り組み等を紹介し、その成果などから、シリア危機を乗り越えるための創造的アプローチの必要性和、アプローチの考え方等を提言しました。

直面する世界的危機を乗り越えるためには、社会課題解決のためのイノベーションが必要とされます。この危機を打開するためには、今までに解決できなかったことを解決するための視点や、方法の転換が必要だという事です。イノベーションを起こすためには様々な立場の人が問題意識を持ち、課題の解決に向かって共有できるビジョンを持つ事がとても重要です。共有ビジョンを持つ事によって、様々な立場の人がお互いを尊重しつつ知恵を出し合う事が出来ます。と小美野事務局長は、イノベーションの必要性と、それを起こすにあたっての多様性の容認と協働の重要性を強調しました。

また人道サミットに先立って、仙台で行われた『Humanitarian Innovation Forum Japan 2016』において、持続的なイノベーション創発プラットフォームの構築が必要だと考える有志が各界より結集し、NGO、企業、政府が協働できる方法を検討した事。世界人道サミットでこの成果を報告した事を紹介しました。そしてこの仙台の成果から、難民の問題も視点を変え戦略的に捉え、人の流れを、脅威ではなくチャンスとして捉えられないだろうか、など提言しました。

2. お茶の水女子大学「NPO論」講義 『現場から、そして今後に向けたメッセージ』

開催：2016年6月20日(月) 於：お茶の水女子大学 グローバル文化学環「NPO論」講座



▲グローバル文化学環の講座「NPO論」を講義する小美野事務局長

小美野事務局長は、お茶の水女子大学・グローバル協カセンターからの要請で、1～4年生に向け、NPO入門編という形でCWS Japanの活動や、その現場、ビジョン等を含めNPO/NGOについて講義を行いました。

まず基本的人権が侵害されている世界の人々の実態を数字で示し、深刻な現況を説明しました。この数字自体が初耳だった学生も多かったようです。さらに熊本地震、アフガニスタン・パキスタン地震支援活動、世界人道サミットへの出席、ステークホルダーとの連携、ネットワーク仕組み作り等、CWS Japanの多岐に亘る活動話し、NGOの「職場」としての多面性と、「社会的影響力」について、具体的に示しました。

さらに仕事として関わろうと考えた時に、どう「心構え」や「適性」を自分で作っていくかを、学生のための「5ヶ条の贈る言葉」として話しました。講義後、学生が答えてくれたアンケートによると、この「5ヶ条の贈る言葉」が、将来に悩む学生たちの心に響き、NGOと言うより「社会人入門」のメッセージとして、学生に広く受け入れられたようです。

社会的課題の解決法とCWS Japanの活動について「共通のビジョン」から「様々なステークホルダーとの連携」、そして「ネットワークと仕組み作り」に至る価値感を、学生が理解してくださったら、と考えての講義でもありました。その点で「5ヶ条の贈る言葉」は、大きな意味でCWS Japanの基本姿勢を伝えるものでもあるので、学生が感銘を得てくれたとしたら嬉しい事です。

一人ひとりが、自分の将来と見え始めた世界を考えている事が窺える、講義へのアンケートを手にし、このように素直で人の痛みが感じられる学生さんたちが、成長しCWS Japanを始めNGO/NPOの世界にたくさん現れてくれる事を思いました。

今後ともCWS Japanへ、ご支援の程、どうぞよろしくお願いいたします。